様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　４ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４３２

研究課題名（和文）『金瓶梅詞話』新訳のための基礎研究

研究課題名（英文）Basic research toward Japanese retranslation of Jin Ping Mei cihua

研究代表者
田中　智行（Tanaka, Tomoyuki）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：５０５３１８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題のテーマである『金瓶梅詞話』新訳について、三分冊のうち上巻を2018年に出版し、中巻をほぼ完成させて2021年に出版する予定である。訳語・訳文を丁寧に検討し、難解な語の説明や引用される文学作品の出典、同時代の批評などを注釈に盛り込むなどして、一般読者にとって読みやすく、なおかつ学術的にも価値のある翻訳になるよう努めた。新訳の上巻は、専門家による書評でも訳語の的確さを高く評価された。このほか、翻訳作業の過程で得た成果の一部を論文や学会発表の形で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『金瓶梅』は書名こそよく知られているものの翻訳に恵まれず、最良の版本に詳細な注釈をほどこした完訳がこれまで出版されていなかった。いままで読まれてきた翻訳は研究が飛躍的に発展する前のものであり、現在の研究水準から見ると不十分な点が多い。本研究の成果である『金瓶梅』新訳の出版は、学術的に信頼できる訳文と注釈を提供するのみならず、一般読者の中国古典、ひいては中国の文化・社会に対する理解の深化にも、少なからず貢献できるものと考える。

研究成果の概要（英文）：I published the first volume of the retranslation of Jin Ping Mei, the theme of this grant project, in 2018 and have almost finished working on the second volume, which will be published in 2021 (full translation will consist of three volumes). Besides thoroughly examining the translation itself, I have tried to make the retranslation not only readable for general readers, but also valuable in academics by explaining the meaning of difficult words, indicating the source of quotations, and translating contemporary commentary in the plentiful notes. The first volume of the retranslation was highly praised for its accuracy in the book review written by a specialist. Also, I have published some articles and presentations as a part of the harvest reaped from the work on the translation.

研究分野：中国文学

キーワード：金瓶梅　中国古典文学　白話小説　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『金瓶梅』は、その書名のみは非常に広く知られた作品であるものの、いわゆる四大奇書（ほか三作品は『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』）と比べて翻訳に恵まれず、最良の版本であるとされる詞話本に注釈をほどこした完訳書が存在しなかった。

従来、我が国における『金瓶梅』の学術的な翻訳は、小野忍・千田九一氏の手にかかるものにほぼ限られていた。しかしこれは、現時点からみて問題点があまりに多い翻訳であった。まず翻訳された範囲についていうならば、全訳とはいうもののある種の性描写はすべて省略されており、完結性をもつ作品として鑑賞できないものであった。また旧訳当時の研究水準からやむを得ない面もあろうが、注釈があまりにも少なく、とくに先行作品の引用（詩詞や戯曲など）についての出典がほとんど注記されていない。本作品はたしかに新奇な作品ではあるが、他方で旧来の文学作品の養分をさまざまに吸収している。ところが旧訳では作品のそのような一面がほとんど浮かび上がらない。出典の調査は旧訳以降、飛躍的に精密に行われるようになり、引用元の作品と合わせ読むことで『金瓶梅』の本文をより確実に理解できるようになっただけでなく、さまざまな先行作品を踏まえて、それらをいわば組み直すことによって、『金瓶梅』があらたな世界を築こうとしたことが明らかになってきた。ほかにも旧訳には、見過ごすことのできない誤りや、よくわからぬままごまかしている不正確な箇所、矛盾を放置している箇所、日本語として理解困難な箇所などが多数見受けられる。さらに、「賞味期限」があるのは翻訳の宿命とはいえ、旧訳は最初に出た東方書局版（１９４８～４９、未完）からすでに七十年以上を経過しており、現在の読者にとっては訳文そのものが古めかしく映ることが否めない。

こうした旧訳の問題点は、筆者が大学院に進学し『金瓶梅』研究に着手した前世紀末には、すでに広く認知されていたと記憶するが、その後新しい翻訳がなされることもなく二十年近くが経過していた。

２．研究の目的

『金瓶梅』には俗語が多用されており、専門の辞典なども刊行されてはいるものの、それでもなお訳出には多大の労力が必要であり、この領域を専門とするごく少数の研究者以外には、すんなりと原文で通読できる作品ではない。きわめて重要な作品でありながら学術的に信頼できる翻訳の定本が存在しない状況をあらため、信頼度が高く、かつ一般読者にも読みやすい文体の新訳を刊行することを、本研究の最大の目的とした。

またこの作品には旧訳以降の大量の研究の蓄積があり（特に文革以後の中国における研究の進展は目覚ましい）、本文の校訂はもちろん、詩詞・戯曲・小説など非常に多岐にわたる先行作品からの引用の出処研究、作中で用いられている方言やしゃれ言葉、装身具や食べ物、寝具などにいたるまで、多彩な研究が展開されてきた。裏を返せばそれだけ本作に多様な研究に資するだけの内容が盛り込まれているということであり、今回の新訳においては、それらの貴重な研究成果をできる限り活用し、正確な訳文を作成することを目指した。

３．研究の方法

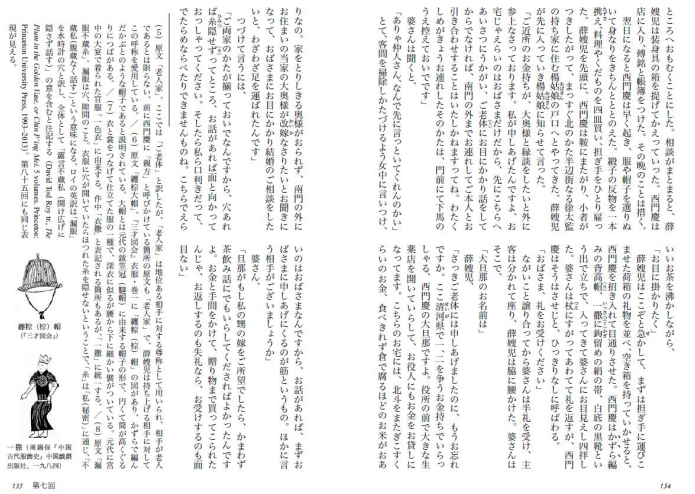
本文の底本としては、我が国に蔵される二種類の『新刻金瓶梅詞話』にもとづき出版された影印本（大安）を底本とし、校訂にはいわゆる崇禎本を参照するほか、近年の研究者の手になるものとして、白維国ほか『金瓶梅詞話校注』（岳麓書社）、梅節『金瓶梅詞話校読記』（漢語大詞典出版社）をも利用した。本文の難解な語の解釈にあたっては、網羅的なものとしては前掲の『金瓶梅詞話校注』、また同じ白維国の編にかかり『校注』以後の研究をも踏まえた『金瓶梅詞典』新版（線装書局）なども参照した。その他、語学的見地からの専門書も必要に応じて参照した。料理・家具・衣服をはじめとする「もの」に関する情報についても、『金瓶梅鑑賞辞典』『金瓶梅大辞典』といった工具書のほか、それぞれの分野の専門書（服飾辞典や楽器辞典、明清家具の専著、この作品の飲食物を論じた専著など）も複数参照し、できる限り広い資料に参着しつつ翻訳するように心がけた。

また素材調査を行う場合、大きな力を発揮するのが、近年発達のいちじるしいデータベース・ソフトで、場合に応じて積極的に利用した。ワープロソフトの検索機能も最大限にいかし、訳語をできる限り統一する点も新訳の特徴である。本作品においては、おなじ表現の反復による表現効果が企図されているといわれ、そのような特徴を日本語訳で再現することを試みた。

ほかに、明・清代の批評（評点）を積極的に訳出することで、古典的な（意外にも斬新なことの多い）読み方を紹介することも目指した。

４．研究成果

2018 年に『新訳金瓶梅』上巻を鳥影社から上梓した。上巻には第一回～第三十三回と序跋を収録した（全７１２頁）。上でも述べたように、正確な語釈と詳細な注釈を心がけたほか、言葉だけではわかりにくい楽器や服飾については図版も掲載するなどして、読みやすい翻訳と訳注にすることができたと自負している。



『新訳金瓶梅』上巻書影

上巻には広島大学の川島優子氏が書評（『東方』2019 年 1 月号）を寄せてくださり、「訳語の斬新さもさることながら、本書の真骨頂、従来の訳本群との決定的な違いは、その注にこそある」「本書の読みやすさは、単に当世風の訳語が当てられているためだけではない（そうした手法であれば、かつての訳本群にも採用されていた）。徹底的な調査によって学問的な裏付けが取られた上で、最適な訳語が選ばれているのである」と評された。

このほか、朝日新聞（2018 年 5 月 9 日東京版夕刊）、中日新聞（同 8 月 17 日夕刊）、共同通信配信による各紙に記事が掲載されるなど、大きな反響を得ることができた。国外でも、北京外国語大学の「翻訳界」に、青島大学・任清梅氏によるインタビューが掲載された。

上巻刊行時にはおおむね第 50 回までの翻訳を終えていたが、上巻刊行後はすみやかに中巻の翻訳作業を進め、2019 年秋に第 66 回までを訳了し、訳文の見直し作業に取り掛かった。膨大な分量であったが一年強の期間で見直しを終えて 2020 年冬に入稿し、本報告書作成時点では中巻の初校を進めている。

中巻においてもひきつづき緻密な訳文を作成し、わかりやすい注釈を施すことを心がけている。なかにはいままで注目されてこなかった先行作品からの引用などの指摘もあり、ほんの一例を挙げるなら、たとえば第 59 回で尼僧が『仏頂心陀羅尼経』の故事を語る寸前のセリフには明代に成立した道教経典『太上三元賜福赦罪解厄消災延生保命妙経』と共通する言い回しが多い。また第 60 回に見られる二首の歌について、従来第一首のみ『北宮詞紀外集』巻五に入っていることが指摘されていたところ、清・褚人穫『堅瓠乙集』巻三に二首そろって「赶蝶」の題で収められ、「伝奇」からの引用としていることを見出した。これら一つずつはごく微視的な発見にすぎぬものの、全体として『金瓶梅』という作品がどのように構築されたのかを考える上では大きな意味をもつ作業であると信じる。

注釈数は（短いものも含むとはいえ）中巻までで約二千条を数える。これは言うまでもなく、あらゆる既存の日本語訳を大きく凌駕し、かつ質においても優れていると信じる。『金瓶梅』の場合、見慣れぬ表現も多いので、対照できる表現を他書に見出すことで安定した解釈がはじめて可能になる場合も少なくない。こうした作業の積み重ねにより、従来に比べ格段に正確かつ読みやすい新訳を達成することができたと考えている。

このほか、北京外国語大学主催の翻訳学に関する国際シンポジウムでの基調講演（英語）の記録が公刊された。そのほかにも、『金瓶梅』研究の国際シンポジウムにおける口頭発表や、翻訳をめぐるエッセイなどを公刊した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田中智行	４．巻 78
２．論文標題 翻訳と時代と	５．発行年 2019年
３．雑誌名 季刊文科	６．最初と最後の頁 70‐71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡崎由美、田中智行ほか８名	４．巻 23
２．論文標題 2018年度関東例会シンポジウムトークセッション　セッション①新しい日本語翻訳がもたらす白話小説受容の新時代	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国古典小説研究	６．最初と最後の頁 (印刷中)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中智行	４．巻 57
２．論文標題 洒落る（※エッセイ）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 トンシュエ	６．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中智行	４．巻 3393
２．論文標題 書評：武田雅哉『西遊記－妖怪たちのカーニヴァル』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 5-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoyuki TANAKA	4．巻 10
2．論文標題 Filtration or Remolding: The Role of the Translator as an Intentional Mediator	5．発行年 2020年
3．雑誌名 翻訳界（Translation Horizons）	6．最初と最後の頁 138-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中智行	4．巻 7
2．論文標題 古典研究の公と私ーー書評：川島優子『『金瓶梅』の構想とその受容』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト（言語文化の比較と交流）	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中智行、任清梅	4．巻 11
2．論文標題 《金瓶梅》的魅力--日本漢学家、《金瓶梅》訳者田中智行先生訪談録	5．発行年 2020年
3．雑誌名 翻訳界（Translation Horizons）	6．最初と最後の頁 189-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 田中智行	4．巻 8
2．論文標題 語り直される場面 ―『金瓶梅』における作中人物の回顧行為をめぐる試論―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト（言語文化の比較と交流）	6．最初と最後の頁 未定（印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 田中智行
２．発表標題 Filtration or Remolding: The Role of the Translator as an Intentional Mediator
３．学会等名 The 4th Summit Forum of Translation Horizons and International Symposium on Chinese Culture Going Global（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中智行・二階堂善弘・中塚亮・二ノ宮聡・後藤裕也・西川芳樹・林雅清・岡崎由美・松浦智子
２．発表標題 「新しい日本語翻訳がもたらす中国白話小説受容の新時代」（シンポジウム「中国古典白話文芸の再生　～翻訳・翻案の歴史・現状・展望～」中のトークセッション）
３．学会等名 中国古典小説研究会　2018年度関東例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中智行
２．発表標題 《金瓶梅》第三十九回的結構
３．学会等名 第十六届（上海）国際《金瓶梅》学術研討会（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 田中智行	４．発行年 2021年
２．出版社 鳥影社	５．総ページ数 839（予定）
３．書名 新訳 金瓶梅 中巻	

１．著者名 高芝麻子・遠藤星希・山崎藍・田中智行・馬場昭佳	４．発行年 2021年
２．出版社 新典社	５．総ページ数 302（予定）
３．書名 とびらをあける中国文学――日本文化の展望台	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関